

本辞典の特色

欧米でロングセラーの決定版辞典
『マクミラン版・世界女性人名大辞典』を完訳。

政治・経済・宗教・文学・芸術をはじめ、あらゆる分野で活躍した古今東西の女性約20000人を収載。

経歴・業績・学歴等をはじめ、詳細な伝記を収めた「読む辞典」。

排列は人名仮名読みの五十音順。

掲載項目は、見出人名、原綴、生没年、本文、参考文献など。

本名のほか、旧姓・別名・通称・筆名等もすべて示す。

巻末に原綴（欧文）索引および分野別索引を付す。

肖像写真約200枚を掲載。

図書館でのレファレンスに必携。

国書刊行会

東京都板橋区志村 1-13-15 TEL: 03-5970-7421

FAX: 03-5970-7427 e-mail: info@kokusho.co.jp http://www.kokusho.co.jp

B5版
上製クロス装
函入
700頁
予価・28000円
ISBN4-336-04396-5

竹村 和子 たけむら・かずこ

1954年生まれ。お茶の水女子大学大学院教授。専門：英語圏文学・フェミニズム批評理論。著書に『フェミニズム』(岩波書店・思考のフロンティア)、『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』(岩波書店)ほか。訳書にジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(青土社)、トリン・T・ミンハ『女性・ネイティブ・他者』(岩波書店)ほか。

取扱い書店

申込書：
マクミラン版 世界女性人名大辞典

予価: 28,000円

注文数 ご氏名

ご住所

TEL

国書刊行会

T 174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15

TEL: 03-5970-7421

FAX: 03-5970-7427

The Macmillan Dictionary of Women's Biography



マクミラン版

世界女性人名 大辞典

歴史上傑出した女性の伝記を集大成し、
欧米でロングセラーとなった決定版辞典を完訳

編纂 ジェニファー・アグロウ

監訳 竹村 和子

国書刊行会

「辞典なら、当たり前」と思っている方もいようが、じつはそうではない。というのも

限られた頁数のなかで、できるだけ数多くエントリーし、その詳細な解説をつけ、かつ

無味乾燥な事項の羅列ではなく、生き生きと眼前に迫るように叙述するのは至難の業だからだ。だから事典・辞書の編者は、つねに煩悶する。その点、本書は、エントリー

数・情報量・生彩に満ちた描写、この三者の絶妙なバランスを取っている。

監訳者のことば

竹村 和子



まず〈引く〉について。本書の特色は、収録女性2000人という、その驚異的な数だけではない。むろんそれに加えて、女性運動家・政治家から、王族・芸術家・スポーツ選手、はてはスパイまで、活動領域も多岐にわたり、時代も紀元前から現在までと幅広いが、もう一つ、ぜひ特筆すべきは、収録女性を選ぶに当たっての編者の姿勢である。本書は単に、古今東西の女たちを寄せ集めたのではない。編纂者の緒言にもあるように、ともすれば歴史のなかに埋もれ、あるいは曲解されてきた女たちの「強さ」や「力」を浮き彫りにしようとする。だから叙述は彼女たちの人生の細部にまで触れるものとなり、そこにこそ、本書が〈読む〉辞典たりうる所以がある。

大部の出版物ではあるが、だからこそ座右において、つづづれに頁をめくつて欲しい。なんとも凄まじい女たちの人生が、読者の性別にかかわりなく、わたしたちを圧倒し、勇気づけることだろう。しかも本書は、家庭環境・教育歴・業績・地位・人間関係など、資料的情報が満載されている。まさに〈知る〉ための辞典もある。

翻訳にはほぼ五年を費やし、訳だけでなく、可能な限り専門的視野からのチェックを入れた。結果的に原著よりも正確で、最新の情報が盛り込まれていると自負している。さまざまな作業に携わってくれた大勢の人々に感謝しつつ、その人々とともに、本書をいま日本の読者にお届けすることができるのを、このうえなく光榮に思っている。

上野 千鶴子

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

人名辞典の世界では、男女共同参画は起きていない。一八八五年にイギリスで刊行された『オックスフォード英国大人名辞典』は全六十巻にのぼる大著だが、うち女性の比率は43%にすぎない。一〇〇年ぶりの改訂版の刊行にあたっては、ジエンダーに対する配慮が強く働いたという。日本には『人事興信録』があるが、別名『紳士録』とも呼ばれるように、男性に偏っている。人名辞典は「有名人」を収録する。その中で男は名を残し、女は「無名」とどまる傾向がある。だが、有名と無名の区別は採用の基準次第で変わる。『世界女性人名大辞典』の編集方針は型破りだ。国境を越え、ジャンルを越え、常軌を逸した女や、存命中の女性を大胆に収録している。エントリーや見れば、英語圏に偏っているとか、近代以降に集中しているとか、政治や社会運動に重点があるとか、バイアスを指摘すればきりがないが、編者はこの種のプロジェクトに「客觀性はのぞみえない」とわかるびれない。

それよりこのほどで無謀な試みから私たちが学ぶのは、女を無名から掬い上げるのは『We remember you』(わたしがあなたを覚えていたわ)という女たちの集合的な努力の成果にほかならない、ということだ。

河野 貴代美

(お茶の水女子大学ジエンダー研究センター教授)

読んで驚いた、感動した。
なんという女たちの軌跡であることか。彼女たちの多くは「狂気」と誹られ、また実際に狂気に「乗っ取られ」、あるいは狂気と正気の半境を見事に生き抜いているのである。

その内実は、一貫して「女であること」の苦渋であり、喜びであり、成功であり、挫折である。
彼女たちの幾割かは、歴史のなかに轟音を立て、ないしは省みられることがなく、ひつそりと沈み、幾割かは燐然と輝いて歴史の表面を生きた(いる)。

だからといって、このような女たちの生き方をモデルにすることなどないのである。あなたはあなたの生を生きればいい。ただ辛く、トネルの先が見えないと、「わたしが側にいるよ」とささやいてくれる女を、このなかに一人や二人は見出すだろう。そういう時本書は自己セラピーの役割をはたしてくれるに違いない。

推薦のことば

マントノン夫人

マントノン夫人[旧姓:ドービニュ] フランソワーズ de Maintenon [d'Aubigné], Françoise, Madame (1635-1719)

フランス王ルイ14世の第2夫人。父親はアグリッパ・ドービニュの息子で、ユグノー(16-17世紀フランスのカルヴァン派信徒)の将校で詩人。父親が娘誕生時に借金で獄中の身にあったため、フランソワーズはポワトゥーのニオール監獄で生まれ、7歳になるまでカルヴァン信徒の叔母ヴィレットから教育を受けた。1645年の父親の釈放後、父親に何らかの公務職が見つかることを期待して一家はマルティニクに移ったが、その2年後に父親が死去すると同地を離れた。



マントノン夫人

その後フランソワーズは、もう一人の叔母で非常に厳格なド・ヌイアン夫人に育てられることになり、その結果熱心なカトリック信徒になった。1652年に母親が死去すると、叔母によってひきあわされた初老の詩人スカロンと結婚し、肢体が不自由だった夫の介護をしながら、夫の文学サロンで数多くの高位の貴族や重作家たちと交流を結んだ。1660年の夫の死後は女

夫人はしばしば宮廷を逃れてサン・シールに赴き、みずから教鞭をとったが、しだいに狂信的な信心深さを示すようになり、それにつれ同校の方針を根本的に変更し、サン・シール校を旧弊な宗教教育の場に変えてしまった。同校は1692年以降は正規のウルスラ会修道院になった。夫人は1715年のルイ14世の死去と同時にサン・シールに隠退し、人生最後の4年間をここで過ごした。

C. Haldane, *Madame de Maintenon* (1970)

マンリー メアリー (デラリヴィエもしくはド・ラ・リヴィエール) Manley, Mary (de la Rivière; Delarivier) (1663-1724)

英國の小説家、論客。のちにジャージー知事となる王党派の英雄を父に、ジャージーに生まれた。1688年の父親の死後、既婚者ということを知らずに騙され、いとこのジョン・マンリーと結婚し、のちに彼に捨てられた。その後すぐクリーヴランド伯爵夫人とともに1696年まで英国内を旅していたが、同年書簡集が出版され、「ロスト・ラヴァー」、「高貴な災い」の戯曲2作がロンドンで上演された。彼女の苦闘の経験は「リヴィエラの冒險談」(1714)という小説として結実した。

数々の情事と、モールバラ男爵夫人のことを描いた「女王ザーラの秘密の物語」(1705)にみられるように、フィクションを装った当時のゴシップネタの痛快な物語を書いたことで、有名人となった。彼女の代表作はホイッグ党の堕落と陰謀を非難した「新アトラン